

地域の安心・安全のために あなたにできる 愛のアクション



かまた のぶひろ
株式会社タフ・ジャパン 代表取締役 鎌田修広

昭和44(1969)年、神奈川県生まれ。日本体育大学体育学部社会体育学科卒業。在学中にはトライアスロンクラブを創設し、初代主将を務める。平成5年、政令指定都市の消防局へ入局。14年、消防訓練センターの体育訓練担当教官となり、消防庁消防大学校でも「消防体育訓練」の講師を務める。23年に退職し、防災研修や人材育成等を行う株式会社タフ・ジャパンを設立、代表取締役となる。著書に『愛と絆で命をつなぐ「防災道徳教育」』(モロロジー道徳教育財団)、『消防メンタル』(イカロス出版)などがある。

「ヒューマンチェーン」の 関係をめぐる

昨年、私の尊敬する現役救助隊の知人から手記が届きました。そこには、「助けられなかった。最後まで入所者の手を握り締めていたけれど、水位が上がって自分も溺れそうで、苦しくて離してしまった」と。集中豪雨で多くの車いす利用者が心肺停止となった施設の職員が、泣きながら話してくれたそうです。知人は緊急消防援助隊として出動し、なんとか生存者を救助できましたが、一方で、事前に具体的な避難対策をしていれば助かった命があったと、悔やまれる場面もあったそうです。

緊急援助行動というのは、心理学的にいえば「見返りを求めない、純粋な利他行動」のことです。利他行動は、他人を尊重し、他人の利益や幸福のために自己を犠牲にする利他主義(愛他主義)に基づいた行動のことともいえます。私が新人消防士のとき、お世話になった先輩から教えられたことがあります。「人を助けるといふより困っている人に手を差し伸べる、つまり手助けするためにわれわれは存在するのだ」

これは存在するのだ」

今でも強烈に覚えている言葉です。新人である私にいったい何ができるのだろうか――。考え抜いた末、まずはチームの一員になるために、「握手の関係性」よりもさらに強固なつながりである「ヒューマンチェーンの関係性」をめざし、行動に起こしてみました。握手はお互いにつながっているようでその力は意外と弱く、引っ張ると簡単に手と手が離れてしまいます。ヒューマンチェーンはお互いの手首と手首をがっしりと握るので、相手の懐に入り込むようなより強い関係になります。

私もチームの中でヒューマンチェーンの関係を築くために、タイミングを見て自分の心でできるだけさらけ出すことで、先輩の懐に入り込みました。先輩との距離が近づいたことで「相互理解〓お互いさま」の関係性を築くことができ、結果的に現場でのよい仕事につながりました。

一度でも訓練を やっておけばよかった

困っている人に手を差し伸べるのは、何も消防などプロだけの役割ではありません。数年前の四国での大規模な自然災害発生時

に、避難所運営サポートを急遽依頼されました。行ってみるとそこは、避難者と行政とのボタンの掛け違いによって、怒号の飛び交う避難所となっていたのです。私にできたことはごくわずかでしたが、数百名が全員退所して落ち着いたところに再訪問し、当時のリーダーたちに話をうかがったところ、「一度でいいから避難所運営の訓練をしておけばよかった」とのことでした。このように、避難のマニュアルや計画は立派に作られているけれど、訓練をしたことがないというのはよくあることです。

皆さんも、避難所では「避難者〓お客さん」だと思っていないませんか。避難者は避難所の運営側でもあり、主体的に動く必要があります。まずまず防災の重要性が高まる中、昨年はコロナ禍のため、残念なことに全国各地の防災訓練なども軒並み中止に追い込まれました。ところが、私が住んでいる藤沢市辻堂地区防災協議会のメンバーは、あえてチャレンジを選択しました。

役員の平均年齢は約七十歳、五十一歳の私は役員の中でも若いほうでした。このような時期だから中止だろうと誰もが思っていたのですが、「今だからこそ、不安を安心に変えられるような実践的な訓練を一度やってみよう」



「私は、自分自身の大きな手を、もっと日本の安心・安全の備えに貢献できるように活かします」(鎌田)

込んできました。

国内最大手の住宅ローン機関が「都三県の中で選ぶ、「本当に住みやすい街大賞」で、辻堂が第三位に選ばれたのです。

インフラや交通の利便性などが評価されたことは十分理解しています。しかし、私が住んでいる辻堂地区が東日本大震災以降、約十年間ワンチームとなり、安心して暮らすためにさまざまな防災の取り組みを仕掛けてきたことも大きくかわっていると思うのです。

防災に大切なのは、自分の命を大切にすることと同じように、隣近所の人たちの命も大切に思う「道徳心」です。防災は究極のモラルです。辻堂地区の一人ひとりが防災に取り組んだことで街の雰囲気がよくなり、われわれがめざす「安心」という新たな価値が実現した結果だと思っています。

また、そうした取り組みが実現できた背景には、地域の人の温もりがあります。先ほどの避難施設運営トレーニングの際、年長者はこぞって「若い人が言っているのだからやってみようよ」と、私の背中を押してくれました。地域の人の顔がよく見えて、困ったときには知恵を貸してくれる人がすぐそばにいる、そんな人と人とのつながりがあることも、辻堂という街を住みやすくしている理由なのか

重要なのです。反対意見のある人には、「何が反対なのか」をきちんと聞き、時間と労力をかけてチームをつくり上げます。

その後、全員が肚を決めて取り組むことになり、訓練当日までの半年間、最初は資料を使った勉強会や視察研修を実施。大きな変化があったのは、各役員に「訓練の役割と権限」を与えたときでした。雰囲気が一気変わった皆に火がついた状態となり、リーダーの自分は何もすることがないくらい皆が一致団結したのです。

八十名が参加した訓練当日は、地域の病院や大学生とも初めて連携しました。会場となった小学校の校長先生からは「こんなに安心して暮らせる地域に出会ったことがない」というありがたい感想までいただきました。

有事の際に、「一度でいいから避難所運営の訓練をしておけばよかった」とならないように、きちんと訓練を行うことが長年の課題と教訓でもあったので、やり遂げた後は充実感でいっぱいでした。

住みよい街の基準に 安心・安全を

訓練からひと月後、うれしい知らせが舞い

かもしれません。

では、皆さんが暮らす地域を安心・安全で住みやすい街にするためには、どうしたらよいか。皆さんが隣近所同士で、できることをご紹介します。

防災教育のひとつに、「減災コミュニケーションを築くための3ステップ」があります。

ステップ1 会釈(挨拶)→立ち話→連絡先交換

ステップ2 おすそ分け(お茶・食事)趣味・興味↓悩み相談)

ステップ3 SNS(ソーシャル・ネットワーク)キ

ング・サービス(お出かけ)鍵預け)

会釈から始まり、最終的には鍵を預けられる関係性が理想です。そこまでできなくても、隣近所で顔と名前が一致する人が多いと、有事の際に助け合うことができます。また、この関係性は減災に限らず、高齢者の孤立防止、防犯、子供の見守りなどにも有効です。

何かひとつでも簡単な行動を起こすと、先へ進むハードルは下がります。ぜひ勇気を出してひとつでも先のステップをめざしてみましよう。それが、困っている人にあるあなたの愛の手を差し伸べることにもつながります。安心・安全は誰かが与えてくれるものではありません。まず自分が行動を起こすことから始めた結果、得られるものなのです。(文責/本誌)

令和2年11月に行った訓練の様子は「辻堂地区防災協議会」で検索すると動画視聴が可能



う!」という会長のひと言に、全員が背中を押されました。

そして、新型コロナウイルス感染症防止と避難所運営を両立させた、避難施設運営トレーニングの実施が決定し、私は役員二十名のチームリーダーに任命されたのです。

皆さんが通常行う地域や会社での避難訓練は、一時的な訓練で終わりますが、避難施設運営トレーニング